

秋山智久著

『社会福祉専門職の研究』

評者：福山 和女

はじめに

近年、社会福祉の「専門職性」、「専門職」に関する研究が著しく増えてきた。本書の著者は、25年間の長きにわたり、専門職研究、専門職性を追究し続けてこられ、この領域の先駆者であり、先達としてのご貢献は多大である。本書は、社会福祉士という国家資格が制定されて20年にもなるが、その前から社会福祉専門職について研究を続けてこられた著者の集大成とも言える実証研究に基づく理論研究である。社会福祉の領域において四半世紀にわたり収集された膨大な数の実践家による巨大な証言の塊が色濃く凝縮されており、300ページにも及ぶ重みのある書である。「研究者」という専門職としての著者から、実践家に対する厳しくもあり、やさしい暖かな励ましとご指導がぎっしり詰まっているものであると実感した。

社会福祉専門職の概念と条件と実態からの、成立過程の解明が著者のいう本書の課題である。本書は「社会福祉専門職に関する歴史・理論・政策・実態の探究と実態調査 (p.iv)」による論証であり、9章構成である。

歴史的概観と社会福祉士資格制定

まず、専門職に関する問題を著者独自の時代

区分により、歴史的に概観し、社会福祉士制度を特化してその影響や課題の議論に反映させている。著者が社会福祉士制定の過程に関与されていたこともあり、この章は臨場感があり、その極めて困難な過程を潜り抜けたような実感を持つ。著者は、社会福祉資格制度の必要性として4点を提示している。「1. ソーシャルワーカーの社会的発言力の強化, 2. 公正・高度なサービスの提供, 3. ソーシャルワーカーの身分的・経済的保障, 4. 社会的承認の獲得 (p.53).」

これらの目的は、社会福祉士制度の制定20年後の現在でも、十分に専門職の必要性としての課題である。いまだ専門職として確立されていないということであろうか。社会福祉士という資格取得後もソーシャルアクション的活動がままならない現状であり、高齢者への公正かつ高度なサービス提供の保障は十分ではないといわれている。また、仕事の報酬の面でも責任の範囲や重さ、労働量に比して給料が充足されたものではない。ましてや専門職としての社会的認知も低く、同じ福祉領域の従事者からの認知もままならない現状である。社会福祉の施設の中で、いまだに管理者層がこの資格を認めていないところがあると聞く。

他団体の専門職の会報(日本臨床心理士養成、大学院協議会報2008年第7号)によると、専門職資格制定への過程を現在たどっている。その課題検討の内容は、社会福祉士の資格制定にいたる経過に実に類似していることがよく理解できる。ある程度専門性が確立されていると思われる心理臨床の場面でさえも、専門職としての確立について多くの課題を抱えていることが述べられている。たとえば、1) 彼らは専門職であることを証明するための道具もなければ、特定の示す手段も持たない。2) 面接自体も専門職が行ったという広義の面接行為であり、クライアントの個別差があり、援助の方法

も各人各様である。となれば、3)このような専門職を養成・指導する教育サイドにとって、2年間である程度の専門職としてのレベルまでの達成が可能であるのか。この場合、4)教育側の人材の質の確保、力量レベルの定量化、向上化などが、課題となると述べられている(会報, p.8)。臨床心理士の今後の進展に大いに期待したいところである。

社会福祉専門職および専門職性の理論・概念

3章から5章へと進むと、本書の核心である社会福祉専門職の概念と条件が提示され、ソーシャルワーカーや準専門職の定義を明確にししながら、専門職性の理論研究へと結びつけている。

前述の会報を例に取ると、臨床心理士がチームアプローチを重視し、多職種とのコラボレーションは不可欠であるとしている。また、臨床心理士は、援助や支援をすることが必須であり、地域へと出かけていく地域心理を対象にすることがこれから求められるとし、「コーディネーターを得意とする他職種と比べて、そこに臨床心理士らしい姿勢や態度はあるのだろうか(会報, p.8)」と模索している状況が述べられている。また、臨床心理士として組織との関わりをどうすればよいのかと、組織の一員として機能することの必要性にも触れている。

この点に関して、本書の著者が、「専門職性を考察することの困難な理由(p.108)」について一項を設けて解説していることは興味深い点である。以下の理由をあげている。1)社会福祉は種々のレベルでの多様性がある。2)社会福祉における全体性に見る困難性(社会福祉の専門職は何をする人なのかという根本的な問いかけである)。3)生活の持つ総合性(経済的, 社会的, 身体的, 心理的諸問題を取りあげる)があいまいさを生み出す。そして4)社会福祉学における学問としての「定説」が欠如してい

る。これらの理由は、まさしく臨床心理士が大きく取り上げている専門職確立の課題となっている。これは、各専門職の領域や境界線が半透明的になり、半ばそれぞれの特性が同質的かつグローバル化してきたとも考えられる。このように、社会福祉士やソーシャルワーカーという専門職と臨床心理士という専門職とを対峙させることで、専門職性の意味合いが増々不明確になってきていることを理解した。

専門性・専門職性・専門職制度の相関性

第4章で、援助専門職の専門性・専門職性・専門職制度の要点が表にまとめられているが、これは、社会福祉の専門職だけでなく、対人援助をする専門職にも当てはまるものであろう。「臨床心理士らしい特徴を出すには、ケースの病態、見立て、今後の方針等のアセスメントの言葉を持つことや個人の体験過程や職場のグループダイナミックス等にサイコセラピー的視点を活かすこと(会報, p.8)」と述べていることを考えると、本書の著者が作成した専門職性の構成要素としてのレベル、理念・目的、理論、実践の方法や技術、手段の価値、理念・目的の達成手段がそのまま臨床心理士の専門職に適用できそうであり、また、著者が独自に作成した専門性・専門職性・専門職制度の位相図も、より普遍性の高いものとして受け取ることができる。しかし一方、対人援助の実践家をもつ専門職のイメージや機能・役割などの実態についての調査データを詳細に見ると、この専門性・専門職性・専門職制度の相関性からほど遠い、ミクロ・レベルの個人的なものが多く見られ、このデータの多くには、この三者の相関性から理論化できるものや普遍化できるものがあまりないことが見受けられたことは印象的である。

専門職性の実証的研究

第5章から6章にかけて、専門職性の概念や理論の実証を、社会福祉士を例に行っている。前述の会報をここでまた採用したい。地域支援と連携の実践活動をその場限りや特定のクライアントにのみの支援に終わらせることなく、記録をして、データを質的データとして扱うような質的研究は、クライアントからの生データの概念的分析を可能にし、実践活動の理論化を促すことになるかと述べている（会報、p.8）。これは、いわゆる専門性や専門職性を個々の実践家というミクロ・レベルの位置づけから、これらをより広く深く発展させるためにもメゾ及びマクロ・レベルへとその位置づけを進化させることで、より抽象性の高い概念として、普遍化させることが必要であることを説いていると解せる。理論の実践化のみならず実践の理論化は、我われ対人援助者の専門職性の発展には欠くことのできないものであり、目指すべきゴールの達成に有効であると考ええる。

本書では、著者が25年におよぶ長期にわたるソーシャルワーカー全般と社会福祉士をそれぞれ対象に行ったさまざまな全国レベルの調査データに基づき、社会福祉専門職の実態、アイデンティティ及び成立条件を探究し、概念化や理論化により、概念構造や位相図との比較検討をしている。特に、専門職の実態が、この25年間に徐々に変化してきている様子を多くの調査結果の詳細にわたる比較から描写している。これを読むと、実践活動をしている人々の絶え間ない努力にもかかわらず、社会福祉の領域における専門職性や専門職は未だにその確立への遠い道のりを歩んでいる現状があることを実感させられ、筆者も専門職の一員として自らの貢献のなさを悔いる思いである。

今後の課題

最後にまとめとして、著者は社会福祉専門職

の評価の必要性と、これにつながる社会的承認や認知の獲得を課題として提示している。この課題を達成するためには、4つの職能団体、これらは著者が実際に役員として活動に加わり団体の発展に寄与してきた日本ソーシャルワーカー協会、日本医療社会事業協会、日本社会福祉士会であり、加えて日本精神保健福祉士会を取りあげ、米国のNASWを例に、これらの4つの統合の必要性を熱っぽく説いている。

著者が力説するように社会福祉士資格の取得だけでなく、援助者が資格取得後の資質・力量・技術・価値観の精査、評価をすることで、社会福祉士という専門性や専門職性をより発展させることができると思うが、職能集団の内部的切磋琢磨だけでは、なおも発展の速度は遅々たるものにならないだろうか。社会福祉の領域だけでなく、ボーダレスになっている臨床心理や保健・看護という他領域の職能集団との交流や連携の促進が、専門職性の明確な特性を育てるのではないかと。外部的な団体との相互交流を通してこそ、領域内部の団結が強まり、その特性も明確になると考える。

本書の研究は、日本の社会福祉専門職成立の歴史的経過から、当専門職への労働環境、教育的・社会環境的影響について実証し、専門職のアイデンティティ、専門職制度、専門職団体の課題を提示することであり、著者はこのことが専門職の発展に寄与するものと信じ、ひいては社会福祉利用者や社会福祉そのものの向上、発展に貢献できることを幸せに思うと結んでいる（p. vii）。この著者の思いに感謝し、賞賛を贈りたい。

（秋山智久著『社会福祉専門職の研究』（社会福祉研究選書3）ミネルヴァ書房、2007年10月、x+305頁、定価4000円+税）

（ふくやま・かずめ ルーテル学院大学総合人間学部 教授）